

論理的文章における接続表現の機能—学生による作文の分析を通して—

A Study of the Function of Japanese Connectives Indicating Logic Direction in Students' Essays

川端元子 †

Motoko Kawabata

Abstract : Connectives indicate a logical direction in the sentences of paragraph and text comprehension. Though, we find some logical confusion in students' essays and statements. This paper aims to clarify that some factors cause logical confusion by Japanese connectives in student's essays. As a result, we can find two-type connectives in students' essays. One type is casual connectives which use in conversation and the other type is standard used in academic writing. The former has two functions and is different from the latter. That function influences personal relationships and makes logical direction invisible to create good communication between speaker and addressee.

1. はじめに

あるまとまった文章を読む場合、その文章を構成する文同士がどのように関係づけられているのかを知ることが重要である。個別の事象や事態が理解できても、それらがどのような関係を持っているのかわからなければ、その文章の書き手の意図を読み取ることができない。そこで、我々は無意識のうちに文章の中で当該の文が他の部分とどのような関係を持っているのかを考えながら読み進めている。その場合は論理関係や論理展開を可視化する接続表現や、前の部分のどの部分を受けて論理展開しているのかを示す指示詞、そして話し手の認識のあり方を示す一部の副詞が果たす役割が大きい。

このうちの接続表現については、阿部・伊藤（1988）¹⁾や阿部・伊藤（1991）²⁾において、読み手の文章理解の過程において接続詞がどのように利用されているのかということや、文脈理解に貢献するのはどのような接続表現なのかということが考察されてきている。また、村田（2002）³⁾は計量的な手法での文体研究を行い、文学作品や文学論文、社説、工学論文、物理学論文などの接続詞や助詞相当語句の出現状況によって、それぞれの文体的特性の指標となる要素を抽出している。これらの研究は、文章読解や文章作成において接続表現が果たす役割の大きさを示すと同時に、文章読解や論述的な文章作

成において、接続表現の機能に対する知識やその効果的な使用の必要性を示している。

これをふまえて、大学生の作成した文章を読んでもみると、多くの問題点が見つかるが、その問題点は大きく3つのタイプに分けられる。

A：用語の選択や語彙、語句の用法といった文法的側面における知識不足や誤用。

B：Aの側面では必ずしも誤用と言えないが不自然なもの。

C：経験不足によるもの。

Aについては、基礎的な言語力の不足であり、言葉の運用能力の不足であるため、具体的な出現箇所での訂正や修正が容易で、知識習得によってある程度は解決する。研究開発されつつある文章作成支援ツールや推敲ソフトなどでも技術的に解決できる。ただし、それは表面的な解決である。Cについては経験を積むことで解決するし、また型に当てはめることを訓練することによっても解決が可能となろう。「〇〇の書き方」手引き書、マニュアルなどもその一つであり、ワークブック形式などでの訓練が役立つ。これも表面的解決の部類である。表面的解決としたのは、あくまで技術的側面における解決であり、修正のために何が必要で何を習得すれば改善されるのかがわかるレベルであることを必要要件とするからである。

しかし、実際にはAとCの背景にもBの問題があり、ある程度の知識や言語の運用能力があっても、「誤用ではないが不自然」、「論理は理解できるがそのような言

† 愛知工業大学 基礎教育センター（豊田市）

い方はしない」、「平易だけれども言いたいことがわからない」などという状況が生じている。これらの形式的な修正で解決しない問題の方がより重要となっている。

そこで本稿では、学生の作文をもとに文脈展開の問題点を抽出し、接続詞に関わる先行研究をふまえ、論理展開における「わかりにくさ」の原因を探る。(以後、本稿では文の接続関係や文脈展開機能に影響を与える接続詞やそれに類する接続語句を、一括して接続表現と呼ぶこととする。)

なお、考察に際しては 2008 年度に愛知工業大学において「日本語リテラシー」や「プレゼンテーション入門」を受講した学生が講義中に作成した文章を使用した。

2. 学生の作成する文章の問題点

2.1 話し言葉的文体学生の作成する文章の問題点

学生の作成した文章には、日常の会話で用いられる表現と同じ用語や用法が出現する。

まず、語レベルでは省略語、慣用化された新しい用法、仲間内で用いられる一種の若者語が出現する。

- (1) なぜかと言うと、耳で聞いたことを脳で考えそれだけで文章にして書き出してくれるのだから…。(「理想の筆記具」という課題での作文、以下(筆)と記す)
- (2) これはすごいと思って私も使って消しゴムで消してみたら本当に消えた。(筆)
- (3) 多くの種類のしんを入れるとなるとおそらく、シャーペンの大きさが大きくなると思うので、どうやってそれを小型化するかだと思う。(「取扱説明書について」という課題での作文、以下(取説)と記す)
- (4) 電子番組表で予約録画をするには番組表を受信しなければなりません。しかし、その受信内容が何回やってももうまく受信できなかった。(取説)

このほか実質的意味を持つ語句では、「何気に」「数字がかぶらないように(同じ数字が重ならないように)当てはめる」などが、文法的機能を表す形式語では、「回転式にするとかすれば、助かる」や「持っててもいい」などが見られた。接続関係を示す「というか」、「で、次に言えることは」、「あと、炊飯器の説明書では…」なども含まれる。

その文章のその文章の読み手に対して、対象をわかりやすく説明するという条件があったため、丁寧に説明しようとする姿勢の中に、ところどころ例に挙げたような「目の前の友達に話しかけるような文体」、文章語ではない「くだけた表現」が出現したものと想定できる。

2.2 文末表現と「私」の出現

いうまでもなく、学術的な文章では一般に一人称「私」は省略される。論文やレポートは特定の聞き手(読み手)や話し手(書き手)の存在を意識させず、「私」視点にならない客観的な記述が要求されることがその要因である。しかしながら、学生の文章中には一人称の「私」「僕」は頻出する。

(5) なので、私は、機械的なシャープペンシルより、自然な線を書けるえんぴつの方が、何かを書く人の気持ちや、書かれている何かの気持ちが表現しやすいと思う。(筆)

(6) 私はこれこそがユーザーの求める取扱説明書だと思う。(取説)

(7) 自分の意見を言わせてもらおうと、カップ麺に取扱説明書なんて必要ないと思う。(取説)

このような一人称記述と対応して出現するのが、「と思う」という文末表現である。

また、「です」「ます」を用いた敬体も禁止しなければ頻出する。無意識のうちに丁寧に書くことと丁寧表現が結びついていることを伺わせる。

(8) 自己紹介文は、自分のことを端的に説明できるという利点がある代わりに、どう接してあげればいいのかわからないという問題点があります。(取説)

(9) 携帯電話の説明書は分厚い冊子になるほどの量となっている。当然それらをすべて読んでいる人は殆どいません。(取説)

(10) 取説は大事なものなので、いろいろな工夫をして読まれるようになっていけばいいと思います。(取説)

このような「です」「ます」は、文章の書き手と読み手との間にどのような関係性を構築しているのかということを示すマーカーとなっている。「聞き手が不特定・多数で抽象的である場合の伝達場面は〈非共在〉で、共在マーカーは現れない。個別・具体・特定の聞き手が存在する場合、伝達場面は〈共在〉であり、言語形式としての共在マーカーが現れる」(宮地ほか 2007)⁴⁾。「です」「ます」は「共在マーカー」であり、それが現れるということは、書き手の個人的立場を示すことになるとともに、読み手として「提出する相手」を意識した個人的立場の表明にとどまっていることがわかる。「思う」の頻出も同様に考えてよかろう。

2.3 文のねじれと流れの悪さ

次の例からは、意図はわかるが文の構造としてまとまりに欠けるようすが伺える。

(11) 1つ考えているのが1つの穴をシャーペンのしん

論理的文章における接続詞の機能

1本入るくらいにいくつにも区切り、(図の挿入)
色のきりかえかたは考えていないが、これが可能なら、1本のシャープペンで数多くの色を出すことができる。(筆)

(12)だから文字を書いたときに文字がはっきりとしつかりした印象を受けるし、手などに書いた文字のインクがついてしまうこともない。(筆)

(13)利点は、自分で考えて文章にしてまとめなくても、えんぴつが勝手に動いてまとまった文章にしてくれるから、手を自分の意志で動かさなくていいので、よりスムーズに文章にまとめることができる。(筆)

(14)さらにこのペンが今までの筆記具よりすごい所は、今まで筆記具は使用者のきき手でしか使用できなかったが、それはもったいない。(筆)

(11)は途中で補足事項が挿入され、(12)は「だから」のかかり先が不明確、(13)は「利点は」の明確な行き着く先が無い、(14)は「さらに…すごい所は」で累加して述べる内容が同一文中にない。一文の中に同一内容や語句の繰り返しも見られる。

文と文とを関係づける接続語として、「あと」「なので」「ただ」などが散見されるのも特徴である。これらは、会話の中では世代を問わず出現する。しかしながら、書き言葉、特に論文やレポートなどの学術的文章には出現しない。

(12)後もう1つ疑問に思ったのがもし故障かなと思った時の対処の方法の記載のされ方である。(取説)

(13)あと重さは、軽くもなく重くもなく丁度いい重さである。(筆)

(14)あと、炊飯器の取扱説明書では、炊飯器の内鍋の正しいセットの絵だけでなく、間違ったセットの絵も載せていてわかりやすい。(取説)

(15)ただ、シャープペンにはそれを上回る長所もある。(筆)

(16)なのでこのえんぴつを持つ時には注意が必要だ。(筆)

2・1にも提示した話し言葉的用語や用法とも共通するが、これらが使われることの問題点を解明する必要がある。

2・4 先行研究における指摘

以上のような問題点は、日高(1992)⁵⁾や茂住(2006)⁶⁾においても指摘されている。これらはいずれも「口話表現」の授業実践や、就職模擬面接を想定した「口頭説明表現」における大学生の話し方の問題点である。

日高(1992)では、発音や口調といった音声表現の側面の指摘以外に、言葉を繋ぐ無駄な音声(一種のフィラー)や言い切らない言い方、婉曲的な言い方の多用、話

の組み立て方の拙さが指摘されている。茂住(2006)においては、学生の口頭説明をつぶさに取り上げて、わかりにくさを生み出す要素の抽出を行っている。茂住が指摘する主な項目を以下に挙げておく。

- a. 未熟な外来語や創作語彙の使用、語彙の貧弱さという語彙の側面
- b. 接続詞の不適切な使用、未完結な文、係り受けの関係の不明瞭さ、挿入節の出現による文意の曲折という文法的側面。
- c. 談話の内容の客観化や普遍化を阻害する待遇表現や「私」の出現。

この調査のサンプルは、産学共同プロジェクトの内容説明という形式をとっているため、口頭説明でありながら客観的で普遍的な説明を求められる。このような学生の口頭説明の問題点の背景には、情報の未整理なまま自分の言いたいことを述べていくという実態があり、茂住は聞き手にとってわかりやすい話の枠組みを考えることの重要性を指摘している。

茂住が指摘する問題点は、そのまま学生の作文にも当てはまる。文章の論理展開を構築する、またはその前段階として、読み手にわかりやすい話の枠組みを作ることの不足という点である。自身の述べたいことを箇条書きで列挙することはできるが、それを相互に関係づけて図式化する(思考のマッピング)や、上位項目と下位項目といった位置づけを行い整理して論文の内容を樹形図化するトレーニングが絶対的に不足している。つまり、客観的に見直すことの可能な文章でありながら、頭に浮かんだ順に時系列に述べ立てられ、未整理な状況が提示されているといえる。

先に述べたさまざまな論理的な文章を書くための支援ツールは2であげたさまざまな問題を解消する機能を持つ。大野・稲積(2007)⁷⁾によれば、文の長さ、当て字、品詞レベルでの不適切な表現、常用漢字、一人称、形式名詞や接続詞、副詞の表記、係り受け構造に注目した推敲支援、論理の木構造のグラフィカル表示などが可能である。さらに、文の接続関係を利用した推敲支援も想定され、当該箇所における最適な接続表現の提示機能を持つ。しかしながら、話し言葉に頻出する接続表現と文章における接続表現は同じ語句であっても同じ機能とは限らない。すなわち、話し言葉的な流れに出現する接続表現の場合、単純に置き換えられないものが存在することを意味する。したがって、書き手はその接続表現を用いて前後の内容をどのように関係づけたかったのかという自らの心的処理のプロセスを再考することが求められる。

そこで以下の章では、接続詞の使用が論理把握に与える影響について確認したい。

3. 文体によって異なる接続表現の使用傾向

3.1 文体や文章の特性による特徴

文章の文脈展開や文脈把握に与える接続表現の影響を解明するため、以下、種々の文体における接続詞使用の一般的な傾向の種類によってどのような接続詞が使用される傾向をとりあげ、学生の作文における使用傾向と比較する。接続詞の分類については、便宜上、市川 (1978)⁸⁾ に示された下記の分類に従う。この分類は、数多い接続詞機能の研究における基本的な分類であり、論理的な文章作成を支援するためのツールやソフトの作成においても基準とされている。なお、市川 (1978) では、文の接続関係の型として「連鎖」型を挙げているが、これは原則として接続詞が用いられないとされているので、本稿では考察の対象外とする。

表 1. 接続表現の分類と接続表現例

接続の型	接続表現例
順接	前文の内容を条件とするその帰結を後文に述べる型(だから/それで/したがって/すると/かくて)
逆接	前文の内容に反する内容を後文に述べる型(しかし/けれど/だが/それなのに/ところが)
添加	前文の内容に付け加わる内容を後文に述べる型(そして/ついで/そのうえ/また/ならびに)
対比	前文の内容に対して対比的な内容を後文に述べる型(というより/そのかわり/それとも/あるいは/または)
転換	前文の内容から転じて、別個の内容を後文に述べる型(ところで/ときに/さて/それでは/ともあれ)
同列	前文の内容と同列と見なされる内容を後文に重ねて述べる型(すなわち/つまり/ようするに)
補足	前文の内容を補足する内容を後文に述べる型(なぜなら/というのは/ただし/もっとも/ちなみに)

出所) 市川 (1978) をもとに筆者作成

3.1.1 国語教科書に出現する接続表現の傾向

小学校の教材と一般的な文章とを比較した野波ほか (2003)⁹⁾ に以下のような指摘がある。小学校教科書では、全体に文学的な文章と説明的な文章に大差が無く、「順接」、「逆接」、「添加」の出現率が高い。ただし、高学年になると「なぜなら、ただし」などの「同列」が出現する。あくまで、文脈を展開する基本的な接続詞に

慣れることを意図されたものであろうとの指摘がある。

3.1.2 漫画に出現する接続表現の傾向

漫画には登場人物が発した言葉を吹き出しとして示す「会話」部分と、登場人物の心理や独話が書き込まれた「内心」部分、およびそれ以外の状況説明を兼ねた書き込み的な「解説」部分があり、出現部分によって一定の傾向が見られる。全体的な傾向としては、「逆接」が 4 割弱、ついで「順接」「転換」「添加」が多く、これで全体の 9 割を占める。会話と内心部分は類似した傾向を持ち、解説部分に用いられる接続表現とは一線を画する。次の表は『動物のお医者さん』(1~3 巻)、『ヒカルの碁』(1~8 巻) に用いられている接続表現のうち、使用数の多いものについての出現傾向である(川端 2006)¹⁰⁾。

表 2. 漫画における接続表現

型	会話・内心部分	解説部分
順接	だから/それで/で/なら /だったら	こうして/すると
逆接	しかし/けれど/だが/でも	ところが
添加	それに/それから	そして/また/しかも
対比	それより*	(なし)
転換	では/じゃあ/そういえば /それにしても	さて
同列	つまり/だって	(なし)

出所) 川端 (2006) をもとに作成

ただし、「対比」「の「それより」は話題転換としてのみ用いられているため、実質的には「対比」と「同列」に該当する接続関係がない。

3.1.3 社説に出現する接続表現の傾向

新聞の社説 (56 文章) における接続表現の使用傾向を調べた西 (1994)¹¹⁾ においては、「逆接」が 4 割強、「添加」が 2 割で、両方で 6 割を超えることが指摘されている。

新聞の社説は、その性質上、特定の問題を深く掘り下げるものとなっており、新しい話題を導入して変化をつけることはほとんどなく、このような結果になることは当然ともいえる。

論理的文章における接続詞の機能

表 3. 新聞社説における接続表現

順接	その意味で/その結果/そのため/このため/そこで
逆接	しかし/だが/ところが/とはいえ/にもかかわらず
添加	また/さらに/しかも/同時に/そして
対比	一方/むしろ/これに対し/逆に/それとも
転換	それにしても/しかし/では
同列	たとえば/とくに/とりわけ/少なくとも/つまり
補足	ただ
複合	しかし、一方で/だが、たとえば

出所) 西 (1994) をもとに筆者作成

上の表のうち、「転換」「補足」「複合」は 1 パーセント前後である。

3・2 学生の作文に出現する接続表現の傾向

頻出するのは、いくつかの基本的接続表現に限られる。たとえば、順接の「なので」「だから」「よって」「したがって」は、前述内容を受けて結論づける場面で出現する。「よって」は結論としての解答を提示する場合のように型が決まっている。「だから」は自分の導き出した結論を強調するために使われている。

(17)物には、一定の動きがあり、それ以上の動きがない。

なので、物の説明書は書きやすいが… (取説)

(18)よって、自己紹介で取扱説明書のように注意事項ばかり相手に伝えるのは、…知ってもらうことができないので、自己紹介を取扱説明書のようにするのは不適切だとわかる。(取説)

(19)初めてあう人にはいい印象を与えたい。だから、自分の名前他に趣味や好きなことを相手に伝える。(取説)

逆接の表現は「しかし」「だが」のほぼ二種類だが、対比の「逆に」「これに対して」は、その後に反論を述べる場面で用いられる点で使用法は接近する。

(20)自己紹介において自分の性格について…細かく言ったらあまりよい印象を受けないだろう。逆に、取り扱い説明書で自分の性格はこうだという大ざっぱなことでは物足りない。(取説)

(21)これが僕が思う理想の自己紹介である。しかし、この自己紹介が聞き手に詳しく伝わっているかというところ少し疑問に思ってしまう。(取説)

一方で (21) のように、「しかし」が必ずしも「逆接」や「転換」ではなく、前述内容から導かれる当然の帰結へと向かわせないで、流れをいったん切る保留の意味で用いられている例も見られる。

添加の「また」「そして」「さらに」「あと」は、列挙の「まず、次に、最後に」と交替する。転換の「では」

は本題への導入や問題を提起する場面で出現する。

(22)では、初めに二つの使用目的と使用状況の比較から始めてみよう。(取説)

他には、同列の「つまり」、例示の「たとえば」が頻出する。「そこで」「すると」「むしろ」「一方」「ただし」などが散見される。

漫画において使用される接続表現との共通点も多く、基本的な接続詞という点では、国語教科書に見られる論理構成の明示的なタイプが多い。サンプルからは明らかな誤用は見つからず、違和感を覚えるのは、主に、話し言葉用の表現が数多く使用されている点である。他の表現に置き換えが容易である「なので」は交替によって問題が解消されるが、どのような関係を構成しているのかが可視化されない「で」「あと」については詳しい考察が必要といえる。

4. 接続表現による論理構成の境界

4・1 多様な接続表現の存在

本稿ではここまで「接続表現」という術語を用いてきたが、文と文あるいは、文章と文章を関係づける接続語句は多岐にわたる。接続副詞というカテゴリーも存在し、副詞が運用上接続詞的機能を獲得している例も少なくない(川端 2003)¹²⁾。「つまり」「すなわち」「要するに」のように類似した機能を持つ語句も、前 2 者は接続詞、「要するに」は副詞である。「これに対して」「それにしても」のようないくつかの単語による複合語もあり、自身の態度や論理展開を予告するメタ言語、フィラーのような繋ぎの無意味音声も論理関係を構成している。

したがって、文の連接や論理関係の構成において個々の接続詞に注目する際には次の点が重要となろう。その接続表現が客観的な関係構成をするものか、書き手の主観的な事態把握を付加するものか、関係構成を非可視化するためのものかという点である。話し言葉のように時系列で思いついた項目を並べる場合、無意識的に関係構成を保留する接続詞が用いられやすいことは、すでに指摘したとおりである。そのような接続表現を、論理関係を可視化できる接続表現に置き換えるトレーニングが必要となろう。

4・2 論文作成支援ツールにおける接続表現の課題

トレーニングには文章作成支援ツールある程度が有効であろう。論文や技術的な文章作成を支援するツールの開発にあたっては、文章を解析して論理構造を決定づける指標となる表現や語句を抽出する(村田 2002)(山本・

齋藤 2008)¹³⁾、それらがどの場面で用いられれば文脈理解度が上がるかを計算する(阿部・伊藤 1991)、収集した文章構造をもとに茂木型、逆茂木型などの論理展開の型を設定して可視化する(青木・大野・稲積 2008)¹⁴⁾などが行われている。前掲の大野・稲積(2007)では、人工知能学会第 20 回全国大会の中から 250 論文をもちいてデータが収集されている。そして、話し言葉に用いられるものをのぞいた接続表現についてその関係を以下のように分類し、推敲ツールの機能として取り入れている。

表 4. 推敲ツールに利用された接続関係と接続表現例

接続関係	説明と接続表現例
順接	独立した論点が続いている (すると/そして/次に)
補足	前述の事柄について補足している (さらに/しかも/実は) 前述の事柄に対する
理由	理由を述べている (というも/なぜなら)
帰結	前述の事柄から得られる結果を導いている (かくして/こうして/したがって)
逆説	前述の事柄と主張の方向を変更している (しかし/それなのに/反面)
例示	前述の事柄の一例として挙げている (たとえば)
解説	前述の事柄とほぼ同じ内容を繰り返している (すなわち)
転換	前述の事柄とは全く違う事例を挙げている (さて/ところで)

出所) 大野・稲積(2007)をもとに筆者作成

これをもとに、執筆中の文章間の接続関係を読み取り、修正が必要な場合は、どの接続関係が適当かを示唆する仕組みとなっている。この方法により、最適ではないかもしれないが一般的な候補が提示されるようになっていく。

一方、山本・齋藤(2008)では前後の 2 文間の関係構成をもとに、論理構成としての接続表現の型が検討されている。サンプルは Web 上の大量の書類から採集された文章から収集されているが、従来の分類に当てはめるのが難しい用例のあることが指摘されている。結果として、従来の分類とは異なる分類が示されている。このことは、従来の接続詞研究が決定的な分類をできずにいたことの再確認となっている。

表 5. 論理構成としての接続表現の型

接続関係	接続表現	市川(1978)における型
累加	また/そして/しかも /なぜなら/まずは	順接 追加 因果 補足
加反	しかし/だが/でも/ところが	逆接
因果	だから/ゆえに/なので/すると /そうして	順接
並列	一方/もしくは/あるいは/すな わち/つまり	逆接 対比 同列
転換	さて/ところで/では	転換
例示	たとえば	同列

出所) 山本・齋藤(2008)をもとに筆者作成

一般に、接続表現による文の連接機能は、すでにできあがった文や文章段落間の構成を結果として可視化するものである。したがって、文脈把握や理解のためには有効だが、つねに、前述と後続の内容の関連づけを書き手が整理できている必要があることを示している。大野・稲積(2007)においては、作成中の文章と文章を構成する接続関係の候補が 3 種示されるが、それは関連づけの多様さと 2 文間の関連づけだけでは接続表現を特定できないことを示している。

さらに、完成された文章から取り除かれた接続表現を再度挿入して完成する演習では間違いが起きにくい点も注目される。阿部・伊藤(1991)には、接続表現があれば文脈把握が容易となるが、「接続詞によって理解が特に推進される接続関係というのは、もともとその関係づけの難しい接続関係ということができるとはできない」との指摘もある。このことは、接続表現はあくまで文の接続関係の推論を容易するための情報を提示するものであり、接続表現の有無にかかわらず、関係づけられる内容の関係が明示的であることの必要性を示している。これも、読解による文脈把握よりも論理的な叙述の難しさを示す例といえよう。

4・3 接続表現の形式的機能と実際の機能

言語獲得期初期に使用される接続表現に「そして」がある。この「そして」は 2 語文や 3 語文においても出現し、日本語教育の場面でも初級で学習する項目である。作文にも頻出する傾向にある。「そして」は接続の型としては「追加」と分類されるが、実際の使用場面が多岐にわたる便利な接続詞である。その一方で、「そして」の多用された文章は稚拙な印象を与える。たとえば、漫画「動物のお医者さん」(以下、「動物」)の中の一節

論理的文章における接続詞の機能

の、()に入る接続表現は1つではない。

(23)ハムテルの家は広い。()、古い。(「動物」候補としては「また」「さらに」「そして」「そのうえ」「しかも」「しかし」「でも」「だが」「ただし」などが挙げられよう。市川(1978)の分類における「添加」「逆接」「補足」が入ることになる。話題となっている主語が共通なので「転換」が、繋がれる項目が対等なので「順接」が使いにくく、「対比」や「同列」の可能性はあるが、決定づける情報が不足している。

(23)の場合、接続表現を用いずに「ハムテルの家は広くて古い」とすることもできる。それでも接続表現が使われるには理由がある。実際に入る可能性のある接続表現で比較してみると、表される意味の違いが見える。

- (24) a. ハムテルの家は広い。そして、古い。
 b. ハムテルの家は広い。しかも、古い。
 c. ハムテルの家は広い。しかし、古い。

原文はこのあと、主人公が家のドア開けた時のきしむ音、足音、又ドアのきしむ音、その後「おばあさん、ただいま」と声がする。書く時と異なり、文章や談話を読む時や聞く時は、情報の入ってくる順に蓄積され分析が始まる。「そして」はその分析を先送りにする。情報の関係を構成するが、どのような関係かは後続の文章から得られる情報無しには判断できない。「しかし」のような「逆接」は、「広い」の持つ肯定性も否定性も決定し得ない中立的な情報と「古い」の持つ否定的なニュアンスによって対立的な関係を読み取らせるものである。「しかも」は「広い」と「古い」が相乗効果を持たされるため後者の否定的イメージが勝り、「広い」をそのイメージに引き寄せる書き手の主観的操作が見いだせる。「そして」によってその時点でのイメージを無色にすることによって、推論される後続の展開の幅が大きくなること自体が、接続表現を用いた効果となっている。「古い」が肯定的イメージならば「歴史を感じさせる」「年を重ねた重みがある」などとすることも可能であり、あえて中立的なイメージであることが「そして」を効果的にしている。

このように、同じ「添加」であっても「そして」と「しかも」は異なり、「しかも」が客観的記述に不向きであることがわかる。さらに、「そして」があらゆる論理関係が2文では決定づけられないため、論理の構築には有効でないことも明らかである。「そして」の機能は全体を通してはじめて見えるものであり、添加される情報それぞれの関係に左右され、「そして」の意味が決定される。このようなことから、論理的な文章における「そして」は、文章の全体を見通して結論へと内容をまとめる場面でこそ有効であることが、ひけ(1983)¹⁵⁾や森山(2006)¹⁶⁾、川端(2007)などでも示されている。項

目を列挙する際にも最後の項目の提示の局面で用いられ、「そして」を合図に文章が自然と統合されて帰結するという流れを作る機能を持つ。文章で用いられる「そして」が客観的記述に適格であるのはこの点に起因する。

「そして」の例は、接続詞の正しい使用と文意の可視化とが必ずしも連動しないことを示している。作文に見られる「そして」は、文章をとりあえず繋いで関係づけを可視化することを先送りにすることを利用しているが、使用すること自体が誤用にはならないという点で問題の根が深い。

4・4 構成を保留する「追加」の接続表現

「そして」のような関係づけ保留する接続表現に、「あと」「で」「それで」「ただ」「それに」「それと」などがある。改めて用例を見てみよう。

(12)それがよくわからなかった。後もう1つ疑問に思ったのがもし故障かなと思った時の対処の方法の記載のされ方である。(取説)

(15)ただ、シャープペンにはそれを上回る長所もある。(筆)

(16)物の取扱説明書は書きやすいが、人間は何から書いていいのかわからない。それと、自分がわかっていない人にとって、自分の説明書を書くことは困難である。(取説)

これらの使用は、その接続表現を使った時点では前述の内容との関係づけができていないことを意味する。「それに」「それと」「あと」は、いったん終了した話題に続けてその場で思いついたことを付け加えるタイプの「添加」である(森山2006)。その意味で「それから」と同様の機能を持つが、結論部で用いられても「そして」のような全体を見渡して統合する機能は持たない。むしろ、蛇足、余談といった位置づけになる点で、話し言葉に優位に出現する。

この話し言葉的接続表現と流れを保留する表現を実際の場面でどのような接続表現に差し替えるのかについては、個々の文脈に決定される。同時に、叙述の重点がどこにあるのかといった点から、書き手自身が自己の心的処理の過程を捉え直すことによって解決すべき問題といえる。

5. 話し言葉の接続表現と書き言葉の接続表現

前節で問題となった接続詞のうち、形式名詞から接続用法を獲得した「あと」、補足の「ただ」、順接の「で」に共通する問題点について触れておく。

5・1 文章における接続表現「あと」

「あと」は出現場所によって差はあるが、単語レベル、節レベル、文レベル、話題レベルのいずれにも項目の追加として出現する。

5・1・1 接続表現「あと」の性質

「あと」は、基準点から見た「(a)時間的・空間的關係、(b)残余、(c)累加」(茂木 2006)¹⁷⁾を表している。(c)の累加とは、「あと 3 人来る」「あと 10 年生きる」といった、ある数量に一定の数量を追加する場合に使われる。

茂木 (2006) によれば、「あと」が接続表現として用いられる場合は、「添加」に属する接続表現に置き換えられるとされる。ただし、「A.あと B」の A と B は共通の属性を持つ同類の要素であり、さらに、完全な同一項にならないという特徴を持つとされる。実際の用例を見てみても、そのことが確認できる。

(12) それがよくわからなかった。後もう 1 つ疑問に思ったのがもし故障かなと思った時の対処の方法の記載のされ方である。 (取説)

(13) プニプニとした持つと柔らかい素材が使われている。あと重さは、軽くもなく重くもなく丁度いい重さである。 (筆)

(14) 実際のボタンの絵もせている。あと、炊飯器の取扱説明書では、炊飯器の内鍋の正しいセットの絵だけでなく、間違ったセットの絵も載せていてわかりやすい。 (取説)

上の例の中に破線で示したものが共通項であり、非同一である。

これをふまえて、実際に他の「添加」の接続表現に置き換える事ができるのかを検討してみる。森山 (2006) によれば、「また」は共通する属性を持たず、同一でもない「同類異項目」の追加、「そのうえ」「さらに」は「同類異項目同傾向」の追加であり、いずれも「同類異項目」の追加である「あと」とは置き換えにくい。したがって、共通するのは、「そして」「それから」「それと」となる。「それから」「それと」が話し言葉的表現であることを考慮すると、「あと」を置き換えるべきものは「そして」ということになる。話し言葉的表現の「それから」「それと」「あと」は、いずれも発話の追加をその場で行える点で共通する。

5・1・1 発話を追加する意図

では、「そして」ではなく「あと」が出現する理由は何か。茂木 (2006) には、話し言葉における「あと」の出現環境には一定の傾向があると指摘されている。

- a. 「あと」の後に「ね」「さ」「は」がついた「あとね」「あとさ」「あとは」としての出現。
- b. 「あと」の前後に応答詞「うん」や「まあ」「うーん」「なんか」といったフィラーが現れることがある。
- c. 「あと」に続く内容として自問や言いさしが現れる。

以上のような出現環境をもとに、茂木は接続表現「あと」に「付け足し」「場つなぎ」「話題の保持」といた談話管理標識としての機能があることを指摘する。そして、追加でありながら、言いたい話題を継続するための接続表現となっていると述べる。しかしながら、此の点については、他の「それから」「それに」にも共通して起こるものであり、「あと」のみの特性とは言えない。

しかしながら、話題の保持機能がその場における発話の追加である以上、論理的な展開の方向性が定まっていないことは明らかである。そこで、その場面で話題を完結させることを拒否する理由は何であるのかが問題となる。

まず、それまでの時点で自分の言いたい内容が述べられていないか、不十分であると認識したことが考えられる。次に、それまでの間言いたいことを探し続けていた、つまり、検索モードであったことが考えられる。そして、話題の最後が見えたところ、すなわち完結する直前に提示することにより、結果的に強調表現になるという効果を意図しているとも想定できる。前の 2 つは考えの未整理によるところが大きく、最後の用法は対人的な効果の観点から説明されるべきものである。したがって、上記の出現環境で言えば、前者が b と c、後者が a にあたる。ただし、「あと」と共起するフィラーが、談話の継続を意図しつつ心内の情報を検索するタイプであるため(定延・田窪 1995)¹⁸⁾、b や c も対人的な効果を持つことは否めない。

5・2 肯定保留の「ただ」

「ただし」と「ただ」は互いに置き換えられる場面が多い「補足」の接続表現であり、いずれも前述の内容に対して条件的な制約を述べる際に用いられる。両者の違いは、「ただし」が条件的な制約を一方的な通告や要求の提示の形で示すことが多いのに対し、「ただ」は、控えめに条件を提示したり、意見を述べたりする(川越 2007)¹⁹⁾。両者は、論理の流れを一旦保留して反論を提示するという点では、「しかし」とも共通点を持つ。

説明的な文章においても両者は出現し、交替も可能だとされるが、学生の文章には「ただ」の方が出現しやすい。

い。このとき、「ただ」に続くのは書き手の見解である。

(15) ただ、シャープペンにはそれを上回る長所もある。
(筆)

(25) ただ、問題もある。(取説)

上のような見解を述べる場合には、条件的な制約を述べるというよりは、前述の内容に対する反論を提示するものとなっている。一般的な「逆接」と異なるのは、対立軸を持たないという点にある。あくまで全面的な肯定を回避する為の指標となっている。それはたとえば、他の可能性の示唆や前述の内容を完成形とすることへの保留表示ともなる。たとえば、「P. ただし、Q」は前述の内容とともにQという条件的な制約つきのあり方Qを肯定する。一方、「P. ただ、Q」は別側面を提示して完成を目前にして保留する。PとQはどの部分でどういう関係を持っているのかを具体的に示されないまま、多面的な捉え方をしているとのポーズだけが示される。このような「ただ」の保留表示は文章の読み手に対しては断定回避であり、論理的に未整理であることに起因するといえよう。

5・3 便利な「で」

「なので」と似た接続表現として「で」が用いられる。たとえば、覆面算の解答を導きだす手順を400字程度で説明しようとする、正解の導入として「で、答えは898」などと出現する。多くの場合、「ゆえに」「よって」と置き換えられるものである。この「で」は話し言葉でよく用いられ、ほかには、「したがって」「そういうわけで」「それで」「そこで」などの「順接」や、「転換」の「ところで」の代用として用いられることが多い。

(26) で、その後どうなっているの。(転換的用法)

(28) で、それからどうしたの。(順接的用法)

たとえば「順接」の場合、「よって」や「それで」「そこで」はいずれもあることをきっかけに何らかの帰結を導く接続表現である。「よって」「したがって」に対して「それで」「そこで」は前述の内容の制約を受ける点では共通するが、制約の度合い、理由と結果の関係の結びつきは薄い。「転換」の場合も、「ところで」「さて」は全話題を離れて別の話題へと移行するが、「で」は全話題の終了を告げるが、それをふまえて途中を省略して本題に入るといったスタンスとなる。いずれも、前述の内容との関連性を強固にも示さず、切り離しもしない。「で」に置き換えられる接続表現は文脈ごとに異なるが、「これをふまえて」「こういうわけで」という理由を装って組み立てを放棄する関係づけとなっている。

これも論理展開の可視化を阻害する接続表現のひとつ

である。

6. むすび

以上のことから、学生の文章を非論理的にしている要因として接続表現使用に関する未熟さがあることが明らかになった。それは、前節や前々節で接続表現、「そして」「あと」「ただ」「で」を考察して導き出された以下の2点にまとめられる。

a. 接続表現の持つ対人的な機能

b. 論理関係を非可視化する心的操作

aの問題は、2節で挙げた「私」の出現や「思う」の頻出、敬体「です」「ます」の使用などとも共通する問題である。すなわち、学生の文章は、書き手個人を特定しない客観的で普遍的な叙述ではなく、特定個人である書き手と特定個人である読み手が意識された状態での文章作成であることを意味するものであった。

bの問題は、学生たちの文章の問題点と接続表現の誤用や文法的知識の不足を短絡的に結びつけることの危険性を示している。さらに、aとbは対話の時のような読み手を意識した婉曲的述べ方であることや、考えが未整理であるための繋ぎ、「現在考えている最中で結論を出していない」ことを相手に示す指標となる点で共通するものであることが明らかとなった。

また、今回の分析を通して、接続詞の分類が曖昧さを内包していること、接続詞の論理関係の構成機能を考察する際には、話し手の叙述の意図やコンテキスト考慮する必要があることがわかった。個々の接続表現の接続機能については稿を改めることとしたいが、これらは今後の研究をすすめるうえでの阻害要因となる可能性もあるため、今後十分な考慮が必要となるであろう。

-
- 1) 阿部純一, 伊藤俊一: 文章理解における接続詞の働き, 心理学研究, Vol.59, No.4, 241-247, 1988
 - 2) 安部純一, 伊藤俊一: 接続詞の機能と必要性, 心理学研究, Vol.62, No.5, 316-323, 1991
 - 3) 村田年: 論理展開を支える機能語句-接続助詞、助詞相当句による文章のジャンル判別を通して-, 計量国語学, Vol.23, No.4, 185-206, 2002
 - 4) 宮地朝子, 北村雅則, 加藤淳, 石川美紀子, 加藤良徳, 東弘子: 共在性からみた「です・ます」の諸機能, 自然言語処理, Vol.13, No.4, 17-38, 2007
 - 5) 日高貢一郎: 大学生と話し方, 国語の研究 (大分大学) 17, 1992
 - 6) 茂住和世: 日本人大学生の話し方に見られるわかりにくさの諸相-就職模擬面接で求められた口頭説明表現の分析から-, 大学での学習を支える日本語表現能

- 力育成カリキュラムの開発 (科学研究費補助金研究成果報告書:代表 大島弥生,平成 15~17 年度),276-284, 2006
- 7) 大野博之, 稲積宏誠: 文の接続関係を利用した論理方向の可視化による技術文章作成支援, 信学技法, Vol.107, No.4, 27-32, 2007
- 8) 市川孝: 国語教育のための文章論概説, p.89-93, 教育出版, 東京, 1978
- 9) 野波正隆ほか: 小学校教材における接続詞について, 第 39 回大阪教育大学国語教育学会発表論文, 2003
- 10) 川端元子: 接続詞から見たテキストの構造—マンガにおける「そして」の機能, SITES (名古屋大学), Vol.4, No.2, 77-94, 2006
- 11) 西由美子: 新聞社説における接続表現の出現傾向, 国文目白 (日本女子大学), 34, 85-93, 1994
- 12) 川端元子: 副詞の意味機能とテキスト—接続表現に接近する「だいいち」を例に—, SITES (名古屋大学), Vol.1, No.2, 241-259, 2003
- 13) 山本和英・齋藤真実: 用例利用型による文間接続関係の同定, 自然言語処理, Vol.15, No.3, 21-51, 2008
- 14) 青木宏文, 大野博之, 稲積宏誠: 文章作成のためのデザインツールの試作, 教育システム情報学会研究報告, 180-185, 2008
- 15) ひげひろし: 「そして」と「それから」, 教育国語, 83, 44-53, 1985
- 16) 森山卓郎: 「添加」「累加」の接続詞の機能—「そして」と「それから」などをめぐって—, 日本語文法の地平, 3, 187-207, 2006
- 17) 茂木俊伸: 累加の接続詞「あと」をめぐって, 語文と教育 (鳴門教育大学), 20, 144-132, 2006
- 18) 定延利之, 田窪則行: 談話における心的操作モニタ機構—心的操作標識「ええと」と「あの (一)」—, 言語研究, 108, 74-93, 1995
- 19) 川越菜穂子: 補足の接続詞「ただ」「ただし」について—〈聞き手配慮〉を使用条件にした分析—, 人間文化学研究年報 (平成 15 年), 82-101, 2003

(受理 平成 21 年 3 月 19 日)